

三十七、 恐懼

九月十三日。和歌山市の山田秀苗氏の宅で、夜の講話がすんでから、座談がはずむ。これも山田さんと同じ十五銀行に出ていられる、菊谷さんご夫婦もいられる。その奥さんが、空巢ねらいに金を盗まれてから、むしろ盗賊のことが恐ろしくなつて、それからは昼でも恐いという話から花が咲いて「恐れ」ということを中心に、一時二時と、夜がふけるのも忘れてこの問題について考え、またお話も出て、ありがたい一夜を恵まれた。

『大無量寿経』には、衆生のことを群生と言ったり、庶類、黎庶と言ったり、さらに「貧苦」と示し、嘆仏偈には「恐懼」と言つてある。貧苦とは、善根功德において貧しきがゆえに苦しむことであり、恐懼とは読んで字のごとく、おそれ、おそれることである。おそれるといふ字を二つ重ねて、衆生といふものを出したのである。これくらい衆生といふものをうがつた文字はあるまいと思う。貧苦といふ文字は、少し自覚がないと肯けない。世には、僅かな慈善ぐらいが鼻にかかつて、あつぱれ大善人と氣取つている人もあるから。しかし、恐懼といふ文字はだれにでもわかると思う。事に会い、折にふれておそれているのが人間であるがゆえに。

如来は「一切恐懼、為作大安——一切恐懼に為に大安を作さん——」と誓われていられる。大安を作さん。おそれを除いて、大安心にしてやりたいと言われているのである。であるから、み仏のことを大安慰といい、聖人は和讃に、

「慈光はるかにかぶらしめ

ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ

大安慰を歸命せよ。」

と讃えられた。慈悲のみ光のとどく処にのみ安らかさはあるのである。

如来を大安慰とよび、衆生を恐懼といふことは、まことに意味深いことである。如来の大安慰は、衆生の恐懼より生まれられたものであり、それだから、衆生にはたつきかけて、如来の大安慰を衆生の大安慰としてくださるのである。信心が安心とよばれるのもそのためである。

本当の安心は、如来に歸命することによって生まれる。

衆生のおそれは何によつて生まれるのであろうか。答は明らかである。衆生の「愚悪」から生まれるのである。悪が行ぜられる処には必ずおそれが待っている。いかに大胆不敵で、心臓が強いようでも、大悪人は必ず内心深く、恐怖のみを持っている。この恐怖ゆえに六尺大の男が、小男の警官にでも捕えられるのである。

強くなりたければ、おそれをなくすることである。おそれを無くするためには「悪」をどうにかしなくてはならない。

「悪」の問題について、そこに考えられる世界には、いろいろ深さがある。まず考えられるのは、廃悪修善の世界である。悪をやめて善を修することである。やめられる悪はやめたがいい。法律の問題になるような悪は、必ず大恐怖をもたらす因である。それをすらすらやめないで引きずられて行くのでは、恐れより遠ざかることはできない。しこうしてかかる多くの悪は、仏法まで来なくても止めた人は多い。さらに、道徳的な悪がある。たとい、法律では罰せられなくても、道徳的な悪もまた、やめられるかぎりやめなくてはならない。

四十八願の中に第十九願の世界が説かれてあるのは、もちろん、真実なる第十八願の世界に転入せしめてくださる如来方便の世界を開顕せられたのではある。諸善万行の雑善を如来に廻向し、たのみとして如来に救われようとする者のために誓われたのである。しかし、ここで衆生は初めて真剣に善悪を問題にし、善知識の問題について考える。善悪の問題について深刻に考える。善悪の問題について厳粛になる時、多くの廃せらるべき悪は廃せられるであろう。そして外への悪は、内面的悪へと転じ、自己凝視の世界が開かれてくる。麻痺せる心は自覚覚醒への一步をふみ出してくる。それはやがて、憂鬱なる二十願の世界へと導かれ、容赦なく見えてくる自己の悪の正体、それにつき当たって、苦悶しつつ救いを果遂しようとする。自力念仏の世界がここにある。かかる転入の問題は、悪への自覚の過程ではあるが、その人を客観的に観れば、悪人から善人への転廻と観られるであろう。

かくして、おその問題がまったく内面的になつてくる。そして十八願の悪人正機の救いの道が開けてくる。

衆生は、真におそるべき事をおそれまいとする。

しかし真におそれを克服するためには、真におそるべきものをおそれなくてはならない。

真におそるべきことを恐れぬがゆえに、この問題について徹底的解決を得ることなく、不安のうち今日一日の安を盗もうとして、アクセクするのである。

次に、衆生の不安は愚から生まれる。愚とは無明である、疑惑である。真実教による教養なき相である。この愚、すなわち無明こそ、同時に悪の根底である。であるがゆえに 如来の智慧光は、この根本無明を滅ぼして、信心の智慧を成就しようとするのである。

おそれにもいろいろある。盗賊もおそろしいだろうし、墓場や、人焼場も怖いであろう。無実の罪に陥れられることも恐いであろう。戦争に行けば、弾丸もおそろしいであろう。世間に生きてゆく以上、社会的立場名聞を亡ぼされることもおそろしいであろう。病気になるれば死が怖いであろう。地震、雷、火事、親爺、のみではなくて、生死界はおそれをもつて満たされている。一切衆生をよんで「恐懼」とはよく言つたものである。

この恐れは一切が、ついにどうにもならぬものであるならば、ある意味で、人生の問題はいかんともしやらないであろう。よい政治は、国民の不安を除き、善良にして強き父は、家族を不安に入らしめず。不安解脱の問題は、ついに人生全体の問題である。

しこうしてこの鍵を握るものこそ、無智と智慧との問題である。

昔の者は、狐をおそれた。しかし狐が化かすという迷信は、山奥の老人ぐらいになつてしまった。広島県、島根県、山口県などには「イヌガミ」の家筋ということがある。眼にかからぬ犬神という鼠ぐらいの動物がいて、そののいると言われる家の者が他人を恨むと、その犬神が行つて相手を狂人にし、あるいは食い殺すという迷信である。一度犬神だと言われると人は結婚すら嫌がる。新しく犬神の家ができたために、幾十軒の家が、妻を離縁したり兄弟の縁を切つたり、大悲慘事がまきおこることがある。これみな人間の無智からきたことである。

無智の克服こそは人間の開放である。

何ゆえに弾丸が恐いか、言うまでもなく死の問題が横たわっているからである。もし、この死の問題の解決がなく、弾丸をおそれる心の克服がどうにもならぬものであるなら、軍隊を強くする方法もないはずである。日本武士道は、武士道精神によつて、この問題を超えた。

釈尊が、菩提樹下の正覚の御座につかれた時、第六天の大魔王は初め眷属を送つて、正覚の邪魔をなさしめたが、だめと知るや、ついに大魔王自ら現われて毒矢を示し、もし菩薩にして王城に帰るか、あるいは外道の苦行林に帰らばよし、もしどうしても動かぬならば、この毒矢を射ると言つておどした。けれども、釈尊は動かなかった。いな、その矢さえ見えなかつた。彼は、生死をおそれて正覚を成就しようとしたが、その「死」はおそれはしなかつた。さすれば、釈尊には、怖れた死と、怖れなかつた死とあつた。

凡夫は、怖るべき死を怖れず、怖るべからざる死を怖れる。弱さはそこから生まれる。

人間は、真に滅ぶものが滅ぶとわかり、滅ばぬものが滅ばぬとわかれば、大いなるおそれから出ることが出来る。

私は幸にも、滅ばぬものと、滅ぶものとの見分けを、微かにではあるが、明らかにしていた。本来小心者の臆病者をそのままに、少しは強くしていただいた。ありがたいことだと思わずにはいられぬ。生死の一大事ほどの問題を解決して下さる宗教である。真実教である。真実の宗教は、腹の奥の奥底の病源に当たつてくださる。末梢的おそれが解決つかないであろうか。

光明団を經營してゐる私ではある。しかしこのわずか微塵大の光明団の一つや二つ、打ちこわされるよりも、もつと怖いものがあることを知らされた。それよりも怖るべきことは、真実なるものへの不忠実である。如来を盲にすることである。

煩惱のおそれは名利の破壊されることであつても。それであるから、尊きみ教えによつて、内心の間違ひを打ち砕いていただくことのみ考へて歩ませていただくことと心掛けてきた。しかし世の中からは、そうすればするだけいろいろな力が迫つてきておびやかさうとする。中には、ずいぶんの文字をならべたり、無いことまで世の中に吹聴して、光明団を滅ぼさうとする人があるようである。そしてそれがずいぶん効きめがあつたようである。

私の周囲の人は、それだからこそいよいよ忠実に真実の道を歩もうとする。そうすればするだけ、昼出た星のように世の中からにらまれてゐる人さえある。しかし、怖るべきものの轉換が成されてゐるならば、世の中の眼が、ますますその人を磨く。世の中の誤解や悪口雑言よ、もつと強くなれ、われらの歩みよいよいよ忠実となれ。しかし問題だけは永久に残される。

手ももぎとることができ、首も飛ばすことができる。いわんや、名利のごとき浮雲をや。人を葬つて土の中に没落せしめることができる。しかし、永劫に滅ばぬものがある。六字によつて賜る信心である。人はただ、如来のご冥見をおそれねばならぬ。内心の虚偽をおそれねばならない。

ただ、おそれを無くしようとしても、無くなりにはしない。怖れを無くしようとするよりも、真に怖れなくてはならぬものを見出すことである。武士道は、死よりも怖るべきは不名誉であるとし、無道義であるとした。この精神は今の軍隊にも強く流れてゐる。飛行隊が落下傘を身につけないのも、短刀を身につけて出た兵士が多いのも、捕虜になつての瓢全せんぜんよりも、天皇陛下に身命を捧げて玉砕を潔しとするがゆえである。

これみな怖れの轉換である。

恐れは、自覚によつて轉換されてゆく。名利の煩惱にもものを言わせると、如来の御冥見よりも、世間の無責任なる毀誉のほうが悪く恐ろしくなる。それを恐れて浮足が起ち、右往左往浮身をやつすことが、その人の全体となれば、いよいよおそれは深くなる。無明も、おそれを轉換してゆく。しかしそれは、外へ外への流転となる。しかし智慧による自覚は、内へ内へと轉換してゆく。信心の智慧は、ついに汝自身の中におさるべきものを発見せしめたもうであろう。

如来には、四無畏が説かれ、菩薩にも四無畏が説かれ、やがて菩薩の布施行において、財施、法施、無畏施が説かれることは注意しなくてはならない。仏、菩薩は、衆生に「畏れ無きを施す」のである。衆生の三毒は人に畏れを施し、菩薩は衆生に無畏を施す。このことは、私を深い内省へとつれてゆく。

智慧は、ものを「諦」^{あきら}かにして下さる。おそれの原因をつきとめて明らかにすれば、おそれを遠ざかる。盗賊はなぜこわいか。迫害はなぜこわいか。死はなぜこわいか。貧乏はなぜこわいか。

今、自分はぼんやりとしたおそれを懐いている。このぼんやりとしたおそれは、何
が原因であるのか。念仏しつつ静かに内に帰ろう。如来は、大安慰にてまします。
「一切の恐懼に、真に大安を作さん」と誓いたもうてある。いかなる時にも、おそれ多
き不安な人生にも、真の安らぎを与えたもうてあろう。